

高山右近像の形成ーキリスト教禁教下においてー

国文学コース 中世ゼミ 文16-0285 小寺雪月

高山右近(1552頃～1615)はキリシタン大名であり、江戸幕府の禁教令によって海外追放を受けた。今回の論文は、右近が海外追放を受けた後、日本国内でどのように理解されてきたのかを明らかにするものである。戦国当時から江戸末期までの国内文献において描かれた右近を比較した結果、キリシタンとして注目されていたのではなく、大名として活躍した武功が語り継がれてきたことがわかった。

挿入されている「のぶニヤがの野望」の画像は以下より
・「のぶニヤがの野望攻略wiki」 <http://nobunyaganoyabo.wiki.fc2.com/>
・twitter「のぶニヤがの野望」公式アカウント @oda_nobunyaga

目次

高山右近の略歴
荒木村重の乱
賤ヶ岳の戦い
まとめ

高山右近の略歴

- 1552年 摂津高山にて誕生
- 1564年 キリスト教の洗礼を受ける
- 1573年 主君和田惟長を殺害。高槻城主となる
- 1578年 荒木村重の乱が起こる
- 1582年 本能寺の変および山崎の合戦が起こる
- 1583年 賤ヶ岳の戦いが起こる
- 1587年 伴天連追放令により大名をやめる
- 1588年 加賀藩に迎えられる
- 1614年 キリスト教禁教に伴い、国外追放となる
- 1615年 マニラで没する



山崎大合戦之図



大河ドラマ 軍師官兵衛

TVLIFE テレビライフプレミアム
2014 vol.9 SPRING

賤ヶ岳の合戦

信長の後継者争いをきっかけに豊臣秀吉派と柴田勝家派で勃発した戦。右近は秀吉方として岩崎山に参戦したが不利な状況を鑑み、撤退を要請。しかし中川清秀と共に敵軍を迎え討ち、限界まで戦った後に退陣した。

①中川清秀と共に戦う

『佐久間軍記』【類似文献】『豊鑑』、『太閤記』、『新撰豊臣実録』

敵軍佐久間盛政が攻めてきた際、右近は中川清秀を救うために大いに戦った。しかし敵軍が火を放ち、中川も討死する。右近は砦を捨てて撤退した。

②戦わずに撤退する

『賤嶽合戦記』【類似文献】『余吾庄合戦覚書』

脆弱な砦を案じた桑山から共に戦うことを提案され中川は受け入れるものの右近が拒絶する。中川が佐久間軍と奮戦する。一方右近は、敵軍の攻撃よりも早くに撤退し、一戦もしなかった。



討死とされる中川の死を自害とし、勇猛さを詳細に描写するため、中川寄りの人物が記したものと考えられる。

ニヤかがわ清秀

③その他

・『祖父物語』

佐久間盛政が右近の砦を落としたことのみが記している。一方、中川の記述はない。純粋な聞き書きとして、記憶していることを書き留めたものと考えられる。

・『明良洪範』

右近の略歴を記したものであるが、信長に下った経緯など誤った記述もある。賤ヶ岳の合戦での撤退は前田家預けになる程の失敗としている。一方で前田家での武功やキリシタンであるために海外追放になったことなど右近の功罪を記しており、意図的に右近を貶める記述はしていない。

・『高山右近大輔軍功』

『賤嶽合戦記』と同様に、右近は桑山からの共闘を拒絶したものの、砦を捨てて撤退したことが書かれる。しかし右近が佐久間軍と戦ったかは記されていない。また秀吉が「高山ハ退ベシ、中川ハ守ル所ニ死ヘシ」と言ったとし、撤退は主君秀吉が認めたこととする。

まとめ

- 荒木村重の乱において右近がキリシタンであることや追放者であることが影響し、右近が信長に寝返ったことに関して非難するような記述を見出すことはできない。
- 賤ヶ岳の合戦において右近が撤退したことを大きく非難するのは少ない。客観的な事実を述べるものは、右近の行為自体に評価を下そうとする姿勢自体が見られない。右近を非難する立場で描かれたものは、討死した中川清秀を称賛する意図が見られる。

キリシタン禁教下であっても、キリシタン大名高山右近の武功は特別非難されることはなかったと考えられる。非難された原因は、右近がキリシタンであったからではなく、作者の記述態度が影響したものだといえる。



たかま右近

荒木村重の乱

摂津守荒木村重が織田信長に起こした謀反のこと。右近は謀反に反対したものの一時は村重に従った。その後、織田信長に投降する。

①信長によるキリシタン弾圧の脅威により投降

『信長公記』【類似文献】『織田軍記』、『高山右近大輔軍功』、『武功夜話』後半部分

信長が伴天連に対して、右近が信長に味方をすればキリシタンを保護し、背けば弾圧すると脅す。右近はその話を伴天連から聞き、キリシタンの繁栄のために信長へ人質を出して高槻城を開城した。

②キリスト教の教えにより投降

『信長記』【類似文献】『続本朝通鑑』、『三壺聞書』

キリスト教には非義の者に味方しないという教えがあると信長が知っており、忠節を尽くすように伴天連を通して交渉する。右近は伴天連の教義に服して人質を差し出している。

③その他

・『古老茶話』

投降した理由は「利害」としか書かれていない。一方、右近が村重や信長にとって戦で重要な武将であることが書かれている。

・『武功夜話』前半部分

右近から信長に伴天連の保護を求めており、人質を差し出すことも申し出ている。信長は右近が味方するのならばキリシタンを保護すると返答したため、高槻城を開城した。

・『陰徳太平記』

右近がキリシタンであることが書かれていない。右近は主君和田氏を殺害し大名となった「大欲心者」であるため、信長が提示した勸賞によって投降したとする。

『陰徳太平記』は村重の後援者であり、乱ののち匿った吉川家および毛利家の立場で書かれたもの。右近への批判は信仰などの人間性の問題ではなく、筆者の記述姿勢に由来すると考えられる。



ニヤらき村重